
ひっぶ第三部書き直し

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひつぷ第三部書き直し

【Nコード】

N29650

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

70枚完結。第一部と第二部を合わせ、250枚（プラスおまけ120枚）。やや不適切な描写があるため、15禁としました。

刑務所はやなとこだ（前書き）

前書き貸してくれ言われて貸したら返ってこん。

刑務所はやなことだ

ひつぷ第三部があまりに投げやりなので書き直すことにしました。
一応、70枚完結予定（第一部と第二部を合わせ、250枚）

たけしは刑務所に入り、非常につらい目にあった。畑仕事や工場作業を朝から晩までやらされ、飯は芋のしっぽや大根のなっぱ。風呂は三日に一度。しかも同じ部屋のやつがホモっ気があり（刑務所に長くいるうちにそうなったのかもしれないが）寝てるとき身体をべたべた触ってくる。うざい。

ロリ華に会いたい！おっさんはどうでもいいが、ロリ華に会いたい！

たけしは悲しくて悲しくて毎晩しくしく泣いた。鉄格子の外の丸い月がロリ華に見える。

そんなある日のことである。部屋の大ベテラン囚人佐田さんに脱走計画に参加しないかと言われた。

刑務所はやなとこだ（後書き）

秘密後書き団体に恐喝され、後書き32枚を昨晚奪われました。チキシヨウ。一生懸命書いたのに。

ああ無情（前書き）

前書きブルース、ついにリリース。

ああ無情

佐田さんが言うには、穴を掘ってそこから抜け出そうて、まあ単純なパターン。

ただまあこれ五年かかるらしい。たけしは参加を辞退した。まったく泣ける毎日である。何もかもがいやだ。ロリ華に会えなきゃ、この世は地獄だ。

たけしは壁をどんどん叩き、拳から血が出た。

その頃、シャバではロリ華と松本^{おっさん}がデートをしていた。

お洒落なテラスでレモンスカッシュにストローを二本刺しちゅーちゅー吸っている。

「たけし。刑務所で元気でやってるかなあ」

「たけし？誰それ」

「あーまっちゃん。ひどーい」

「うひゃひゃひゃひゃひゃひゃ。すまんすまん。あまりに幸せすぎて」

「あたしもだよ」

「ロリ華」

「まっちゃん」

「チユーーーーー」。

まったくいい気なやつらである。地獄に落ちてほしい。

その頃、たけしは、牢屋で牢屋主に犯されていた。

「おふ！おふ！おふ！」

「あう！あう！あう！」

たけしの尻は血まみれになり、プライドはずたずただ。

「ひつくひつく。ロリ華に会いたいよう。ロリ華に会いたいよう」

鉄格子の外では月が涙をぼろりと流していた。

その頃、松本とロリ華はラブホテル。

「まっちゃん！まっちゃん！まっちゃん！」

「ロリ華！ロリ華！ロリ華！」

ベッドの上で激しくエロく燃えた。

神も仏もないのか。

ラブホテルの窓の外では月がぶんすか怒っていた。

ああ無情（後書き）

後書きおじさん、街に出没する。

ひつぷほつぷ武将(前書き)

前書き、ちよーだい

ひつぽっぽ武将

松本とロリ華は性的には大人の付き合いをしている。しかし、ロリ華は小学生。松本は身体は34歳だが立場は小学生。ゆえに収入がない。

そんなわけで、松本はロリ華の家に養子として暮らしている。

正直、ロリ華の両親は松本を追い出したい。飯をばくばく食うし、勉強もしない（頭はおっさんなので小学生の勉強なんてチヨロいだ）

ただ、追い出すとロリ華が泣く。娘の涙に弱い両親。

家でゴロゴロしてる松本に、ロリ華の母親は「何かやったら？」と言う。

松本は困る。小学生の仕事とは勉強だ。その勉強がチヨロいのだから何もすることがない。

そのとき、松本の頭に一つの単語が浮かんだ。

ほとんど同時だろうか。刑務所で、たけしの頭にも同じ単語が浮かんだ。

「小説」

たけしはその夜から看守さんに紙切れとペンをもらい、寝る前に細かい字で書き始めた。

松本は、学習ノートに書き始めた。

無論、二人の歩むべき道は違う。たけしは辛い苦しい境遇にあるので幸せを求める。ゆえにハートフルな内容になる。

松本は恵まれた平和な環境にいるので、スリルを求める。ゆえにダークな内容になる。

とにかく、二人が動き始めた。まるで、言葉をマシンガンのようにたたみかけるヒップホッパー。あるいは、敵を刀で斬りつける戦

国武将。

二人は言うなりや、ひつぶほつぶ武将！！

ただ二人の作品には共通点があった。ロリ華が出てくる。

たけしは、ロリ華に会いたいからその辛さから、ロリ華に助けてもらう小説を書いた。

松本は、ロリ華と毎日会うからそのストレスも多少あり、ロリ華に暴力をふるう小説を書いた。

とにもかくも、二人のひつぶほつぶ武将がついに動き始めたのである！！！！

ひつぷほつぷ武将（後書き）

後書きくん、どこだー

爽快なり（前書き）

前書きボーイ募集中。

爽快なり

松本は深夜まで書く。ロリ華がエッチしようよと言っても無視。ロリ華があきらめて寝たあとも書き続ける。ロリ華のいびきも気にならない。相当集中してる。目が血走ってる。

たけしも、消灯になってなお鉄格子の外の月の明かりを頼りに書き続ける。

月が「がんばれよ」と、たけしに缶コーヒーを放り投げた。缶コーヒーは鉄格子の間をすり抜けて、牢屋の中に入る。たけしは「ありがとう」とつぶやいて受けとる。

深夜三時くらい二人同時につぶやいた。

「「疲れたなあ。でも爽快だ」」

たけしの書いた作品をいくつか紹介しよう。「大好きな人」「苦痛」「ジェットボーイたけし」。いずれもロリ華と、松本がモデルと思われるでぶ男子が出てくる。「大好きな人」は、ロリ華に助けてほしい気持ちがよく表れている。「苦痛」は、ロリ華といつしよになれない辛さがよく表現できてる。「ジェットボーイたけし」はたけしが早く刑務所から出て活躍したい気持ちがよく伝わる作品だ。

注・ここに、三作品を掲載（それぞれ20枚。なろう読者はライスページの「完結済み」をクリックしよう。全部載ってます）

爽快なり（後書き）

後書きガール募集中。

松本履歴（前書き）

前書き少年、町に出没！

松本履歴

松本はいまロリ華の部屋で小説を書いているが、小さな頃は漫画を描いていた。小さい頃は手塚治虫・藤子不二雄・やなせたかしのファンであった。今は小林よしのりのファン。中学の頃には作曲にはまり、ビートルズのファン。そして、元ビートルのジョン・レノン。お笑いではダウンタウンが出始めた頃でむちゃはまっていた。小説はズッコケ三人組と星新一くらいしか読んでいない。

大学一年までむちゃくちゃ作曲録音をしていたが、大学二年ごろから、バイトや遊びに忙しく、しばらく芸術から遠ざかっている時期があった。ダウンタウンはわずかに観ていた。大学三年の終わり頃から人間関係に疲れてきて、引きこもりがちになる。大学卒業後、数年、引きこもっていた。好きな子の影響も多少あるか。いまだに童貞なので、めっちゃ影響されてるか。ロリ華とセックスしてるやんと思った人。この話が松本の刑務所で観ている夢というのを忘れるね。

この引きこもり時代、集中的に小説や評論を読んだ。映画も相当数観ている。美術館めぐりもたくさんしてる。すべて漫画家になる目的でそれらを消費していた。筒井康隆や小林よしのりにはまった。25歳のとき、デザイン学校に通いながらバイトを始める。学校に通ったり引きこもったりしたのは親の援助があったからで、これはすぐく恵まれてると世間では思われてるが逆で地獄の日々であった。だって、大人なのに仕事がないんだから恐怖以外の何モノでもない。

学校を卒業後もデザイナーになることはなく塾バイトを続ける。パラサイトシングル童貞を続ける。みなさんご存知の通り、34歳で、通り魔をする。それまでの十年間塾バイトをしていた。小説を本格的に書き始めたのは六年くらい前から。けっこう最近だ。二十代後半からだから遅い方だろう。筒井康隆がその年齢のときはすで

にプロ作家として活躍している。まあ漱石は確か四十くらいからデビューしたから、人それぞれなんだけど。

まあそんな話はあまり意味がない。松本がプロ作家にならない限りは意味がない。そして松本は今刑務所に入ってるのでプロ作家は無理である。

それでも松本は夢の中で書き続ける。理由なんてない。それが松本の生きる道なのだ。

それはともかく、たけしの小説ばかり載せるのは不公平なので松本の作品も載せておこう。「留置場・留置場」「祝河野夜兎入院記念コント」「若社長」。いずれも通り魔の経験をモチーフにしている。

（ここに三作品を載せる。なろう読者は、ライスページの完結済みをクリック。ひつぷでは、いずれもヒロインヒーローの名前を口リ華松本に変える。珍と栗だけはそのままでもいいかな。西本を松本にするか）

松本履歴（後書き）

後書き戦争が来週からはじまるらしい。。。

反復

たけしは誰かに読ませたいなあと考え、看守さんに頼み、書いた短編を、原稿用紙にまとめてもらい、それを出版社に送ってもらった。しばらくして、出版社から返事があり、三本同時に、雑誌への掲載が決まった。原稿料が一枚60000円。60枚分なので、実に360万円。たけしはまだ小学五年生。そんな大金手にしたことがない。びっくりしてしまった。小説とはこんなにも儲かるものなのか。出版社から雑誌への連載と書き下ろし単行本の依頼がきた。たけしは最初、刑務所内での仕事をしながら書いていたが、さすがに締め切りに間に合わない。看守に頼み、執筆に専念させてもらった。

しかし、やはり書いてるうちに取材が必要となる。たけしは、今、文芸雑誌「月刊ポンチョ」に「ヨーロッパ慕情」という長編ギャグ小説を連載しており、ヨーロッパに取材旅行に行くということで、看守さんに頼み、一ヶ月間だけ、刑務所から出してもらったことになった。

そのころ、松本は、ロリ華に家を追い出された。あまりに小説ばかり書き、ロリ華を無視しすぎたのだ。

松本は街をさまよった。松本は収入がない。しかも、立場は小学生なのでバイト雇用さえない。しかも、身体はおっさんなので、児童保護施設にも入られない。ロリ華の家を追い出されれば、もうどうにもならない。死ぬしかない。

カバンにロリ華の家でばくってきた包丁を忍ばせている。また通り魔する気か。

もうやめないか。いいかげん、そういうこと。
天からそういう声が聞こえる。

「いや、やる！オレは負けぬ！！」

松本は包丁を取り出し、カバンを放り投げた。

前を歩いていた老婆の背中を刺す刺す刺す！

「うぎゃ。むぎゃ。ぐぎゃああああああああああ」

逃げ惑う人々。返り血を浴び、気持ちよくなってくる松本。やみつきになる。

女子小学生が恐怖のあまり、尻餅をついている。

女子小学生の頭にハンマーを振り落とした。

「ぐげ」

目ん玉が飛び出る。

倒れたところを胸を包丁で刺す。

「うぎゃああああああああああ」

人々は叫び逃げる。警官は来ない。みな、温泉旅行に行っていたのだ。

サラリーマンに石を投げる。後頭部を直撃。倒れたサラリーマンに馬乗りになり背中を刺す刺す刺す！！

「気持ちいい！！」

松本は興奮してきた。勃起してる。

サラリーマンのズボンを下ろしパンツを脱がせ、尻の穴に勃起したちんぼを突っ込んでマッハで動いた。

サラリーマンはすでに死んでいるので何も言わない。

「おふ！おふ！おふ！」

秋の風が吹く。肌寒いはずなのに、松本は燃えていたので全然寒くなかった。

そのとき、松本の頭にある単語が浮かんだ。

小説。

「オレは何をやっているんだ！！」

松本は焦った。通り魔なんかすれば警察に捕まり、ヘタしたら死刑だ。そうなれば、小説がもう書けなくなってしまうではないか。

もう遅い。だいぶ殺している。死体がアスファルトに転がる。手遅れだ。

松本は逃げた。包丁を放り投げ、みんなと逆方向に走って逃げた。

「はあはあ。オレはいつたどこへ行こうとしてるんだ。はあはあ」
警官たちはそのころ、温泉で日本酒を飲んでいた。

「ひつくひく。気持ちいい」

「最高だねえ」

「きんたま音頭だ。よほほのほい」

「なにその歌。チョーうける。うひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ
だいぶ、酔っている。」

自殺するの巻（前書き）

前書きくん、死亡。

自殺するの巻

松本は公園のベンチに座り、はあとため息をついた。もう人生自体に疲れた。肩書きが小学生だからどこも雇ってくれないし、身体がおっさんなので誰も養ってくれない。小説は厳しい世界だ。なかなかプロになるのは難しいだろう。しかも、通り魔までしてしまった。

もう死ぬしかないなと考える。人生に疲れた。

公園にテントを張っていたホームレスのおっちゃんに包丁を借りる。

包丁を握り、上半身裸になり、ベンチに正座する。

「えいつ！」

松本は腹を切った。

その頃、たけしはヨーロッパのマッホリベンマリ王国という小さな国に来ていた。

「いい景色だなあ」

眺めもいいし、空気もいい。

たけしは首都ボリボリヤンにあるレストランに入り、地元の料理を楽しんだ。

「これはなんてお酒ですか？」

「パーミリヤンモリマンガリピッペーボッペースマトリクンヌンゴ
ンダリ酒です」

「は？もっかい言って」

「無理です（現地語で）」

たけしは酔っぱらってちょっといい気分になってきた。

自殺するの巻（後書き）

後書きちゃん、何者かに殺害される!!

地獄だ！（前書き）

前書きはいらんかい。 安いよ。 安いよ。

地獄だ！

まあ当然のことであるが、松本は地獄に行った。

鬼に課せられた仕事、それは、原稿用紙にあいうえおを、んまで書くという仕事。それを朝から晩まで繰り返す。地獄である。生きてるときは、意味のある現実疲れナンセンスギャグ小説を好んで書いてるが、こういうことをやらされると逆に意味のある小説を書きたくなる。

ちなみにこの労役で派生した精神的エネルギーは電力になり、地上に供給される。

松本は仕事が終わりに、地獄アパートに帰る。

「ああしんどいなあ。実に疲れる。明日も明後日もずっと、あいうえおか。こいつは地獄だ」

松本は飯を食ってから原付にまたがり、地獄銭湯へ行った。

その頃、ロリ華は、たけしも松本もいないのでひどく退屈していた。

「たけしやまっちゃんがいないとつまんないな」

ロリ華はケータイをいじってたら、こんなサイトにたどり着いた。

ちびっこ売春婦、募集！

年齢は9歳から12歳まで。

条件は、かわいいこと。

給料は一回、8万円！

仕事内容は、ランドセルを背負いながら、セックスやフェラチオやアナルファックをすること。

ロリ華は「これだ！」と思った。暇潰しになるし、カネが儲かる。ロリ華はまだ子供なので仕事の辛さやしんどさがまだ解っていない。やめた方がいいと思うけどな。

地獄だ！（後書き）

後書き一個ください！

田村サバオと医者

その頃、田村サバオは、仕事が終わってから、夢医院へ行った。

ドアを開けると、十人くらい待合室に人がいた。みんな暗い表情。サバオは保険証を受付に見せ、ソファに座った。雑誌を眺める。人氣連載小説「お尻くん」。顔がお尻になっていて、顔から足と腕が突き出した一等身のギャグキャラクター、お尻くん。サバオは読んでいる途中げらげら笑ってしまい、まわりの人に睨にらまれた。「す、すみません」

予約を入れておいたので、十分くらいして、カウンセリング室に入ることができた。

医者はむちゃくちゃ太っていた。客が多いので、いいモノを食っているのだろう。

「やあ田村さん。最近はどうな夢を観ますか」

「それがですねえ。本当に怖い夢ばかりで」

最近観た夢の話をする。それを医者が分析するわけだ。

「ふうむ。原爆の夢ねえ。殺人の夢とはちよいと違うねえ」

「意味わかんないスよ。普通、夢で楽しいもんでしょう。何でこんな怖い夢ばかり観るのか。本当に」

医者はボールペンを置き、腕を組んだ。サバオのことを考えてるふりして、今日ごは何だろうなあとということをぼんやり考えていた。

ジェットコースターの刑

翌日も、松本は地獄のあいいうえおをやっていた。ちよつとでも怠けると鬼に棍棒で頭を叩かれる。

頭を押さえて転がり回る松本。

「うぎゃああああああああ」

「ふん。遊びでやってんちゃうぞ。お前は罪を償う意思があるのか。くそめ」

一度、耐えられずに原稿用紙に短編を一編書いてしまった。

「はひふへほまみむめもやいゆえよらりるれ、辰夫は喫茶店を出たあと不良にぶつかって喧嘩けんかになった。不良が棍棒で辰夫を叩いてくるので、辰夫はキレてナイフをポケットから取り出し」

見た目は真面目に書いてるので最初、鬼は気づかなかったが、なんだかウキウキして松本が書いているので、これはおかしいと思い、鬼は棍棒を置き、松本の原稿用紙を取り上げた。

「あっ」

「こいつ」

鬼は大激怒して、ジェットコースターの刑にすると言った。

松本は「え。おもしろそう」と喜んだ。

間違いだった。何とこのジェットコースター。時速五百キロである。

しかも、シートベルトなし！

運転中吹っ飛ばやつもいる。松本は必死にボディにしがみつく。ジェットコースターの下で鬼がにやにや笑ってる。

松本は真面目に仕事することにした。

その頃、たけしは、モツパリボンバーベリンコ川の近くにあるメ
ンマリボンマリボッパホテルに泊まっていた。

川の眺めが実にいい。最高だなあと思うたけし。

しかし、そう浸ってばかりもいられない。「ヨーロッパ慕情」第二回の続きにかかる。ノーパソを広げる。今、20枚。あと30枚。できたら、すぐ編集部にファックスで送らないといけない。

小学五年生であるが、作家ともなれば煙草くらいすう。たけしは、ホテル内にある売店で買った「メンバサーポゴッタリヤンマリガン」という名前の地元の煙草で一服した。「わさびの味がするな。まずい」

ホテルのボーイが、さっき電話で頼んだメシヤモリヤンバリタンドットコリヤ（地元の麺料理）を持ってきた。

「マシヨフリコンマリ、マツハポリヤステルゴマンヤ。マモンヤ。ベリアンスン。ケツコスマスマ」

現地語なので、何を言ってるかさっぱりわからないが、たぶんチップ的なものを要求してるのだろう。

たけしは、財布から1マスガンダーリナンパパ札を三枚ほど取り出し、ボーイにあげた。

「スマンコ」

ボーイはそう言ってお辞儀をし、部屋を出た。

メシヤモリ（以下、略）を食べ終わる。なかなかピリからで旨かった。元気が出てきた。腕をまくる。

「さあ。もうひと踏ん張りするか」

狂った社会

その頃、ロリ華は仕事をしていた。ただ、これは児童書なので、ちよいとエロいシーンは書けない。普通のシーンになったらまたロリ華に出演してもらうこととしよう。

まあロリ華が仕事終わるまで待つか。だいぶ時間があるか。

そうだな。作者の話でもするか。作者は今、塾に非正規講師として勤務している。

正直、塾と講師の考えが解離し過ぎてきつい。

講師は十年も勤務してるのに社会保障やボーナスがないのがどうにも我慢できない。納得できない。

あつて当たり前のものがないので相当腹を立てている。

しかし、塾側は、なぜ非正規ごときに社会保障せにやなんのだ、文句あるなら解雇するぞ、代わりの学生講師など腐るほどおるんだ、という姿勢を崩さない。

塾は社会人講師にロボット奴隷化を要求する。しかし、社会人講師は人間でありたい。

意見は平行線である。何でこんなくだらない世の中になってしまったのか。この十年で日本は本当にやばい状況に陥ってしまった。働いてる人が結婚もできないなんて、どれだけ狂った社会なんだ。国が滅ぶぞ。

悲しみの酒だ

悲しみのあまり、作者は歩いて屋台まで行き、酒をあおった。

「ういゝくそ。あほんだら塾め。オレら講師ががんばってるから校舎が成立しとるんだろ。それなのに社会保障がないてどういふことやねん。ひつく」

「ライスちゃん。もうおよしよ。身体に悪いよ」

「うるへゝ大将。酒だ酒だ」

「んもう」

ライスはアルコールに弱い体質のため、二、三杯ですでにべろんべろんになってる。

まったく狂った世の中だ。いったいどうなってやがるんだ。

たかが会社に、労働者の結婚を禁止する権利などあるのだろうか？？？

会社なんて別に神様でも仏様でも何でもないだろう。そこまで内政干渉していいはずがない。結婚くらい自由にさせてくれよ（＝講師に月三十万支払ってくれよ）

ライスは悲しくて悲しくて涙が出る。ライスの小説には通り魔がでてきたりロリコンがでてきたり散々暴れまわるが、ライスは誰も何も文句が言えない孤独な労働者なのだ。

月が涙を流し、屋台のとこだけ雨が降っていた。

ざああああああああああああ。

お尻くん

田村サバ才は、釣りに来ていた。なかなか釣れない。調子が悪い。隣の親父などすでに八匹釣っている。

肩をぽきぽき鳴らす。あーあ。今日はあかな。

サバ才は車に釣り道具を乗せ、走った。

サバ才はちよいと腹がへったなと思い、喫茶店に寄った。

「カルボナーラとコーヒー、ちょうだい」

「かしこまりました」

サバ才は雑誌に目を落とす。お尻くんがすでに地獄に来ており、鬼軍団とドンパチを繰り返していた。お尻くんが例によって、顔のお尻からうんこをぶりぶりぶり出すシーンで、うふふと笑ってしまふ。

他に「ヨーロッパ慕情」という新連載小説も面白い。竹山たけしという新人作家の作品だ。

「こんだけ深みのあるギャグが書けるといことは新人とはいえ、けっこう歳がいつてるのだろうな」

サバ才はたけしが小学五年生ということを知らない。

労働者に生存権を！！？（前書き）

社員を一人残らずぶち殺したい。

労働者に生存権を！！？

また作者の話に戻るが、勤務先の塾で、講師評価シートというのができた。五段階評価で二十ほどチェック項目があり、これにより講師の時給を上げたり下げたりするという。

チェック内容を見るとふざけるなとしか言い様がない。こんだけハードな内容、こんな低賃金でできるわけない。

だいたい、社員（室長）は管理者として、非正規労働者の生活がどれほど苦しいかきちつと把握しているのだろうか。

把握してれば、仕事を減らすか賃金を上げるか、どっちかするはずである。

それなのに「がんばらないと時給を下げますよ」とぬかす。ふざけてんのか、あのくそ女。頭がちよいとおかしい。

というより、五十円上がったとか百円上がったとか、そんなしょーもない世界で戦いたくない。疲れた。

十年間、ずっと負け戦である。死ぬまでに勝つことはあるだろうか。わからない。

ただ、ただ、ひたすら現場に立つ労働者は疲弊している。

ホワイ??

なぜこんなにもバカげたシステムになってしまったのか。ライスは怒りに震える。働いても働いても結婚できない。こんなバカな話があるか。なぜ社員だけが結婚できるようなシステムになってるんだ。

国がバイトに月に十万支給するとか、色々方法はあるはずである。くそみたいな国家に生まれちゃった。

ライスは歩いて屋台まで行く。

「ういゝ大将。酒だ酒だ」

「ライスちゃん。およしよ。身体に悪いよ」

「うるへ」

ライスはアルコールに弱い体質なので、すでにべろんべろんである。

「ライスちゃん。非正規はそんなにひどい状況なのかい?」

「ひつくひつく。社員並みに仕事があるのに、学生アルバイトと同じ額しかもらえない。んなあほんだらな国がどこにある。ひつくひつく」

「くそみたいな世の中だねえ。ライスちゃん、おでんお食べよ。奢りさ」
おこ

「あ、ありがと大将。ひつく」

ライスは屋台で一杯やつてる頃、屋台の近くにあるアパートからロリ華が出てきた。仕事が終わったようだ。ランドセルを背負ってる。

「あーあ。お金はたくさんもらえるけど、もう大人の精液飲みたくないな。あーあ」

ケータイが鳴った。

「ロリ華!」

「あっお母さん」

「よしこちゃんの家で電話したよ。よしこちゃんの家で勉強会というのはウソだったね！」

かなり怒っている。

「それはそのう」

「とにかく、早く帰ってきなさい！事情はあとで聞く！お父さんが倒れたのよ！」

「ええっお父さんが！」

「ごおおおおおお（電車の音）」

電車で病院へ向かうロリ華。

「ああ。あたしがちびっこ売春なんて悪いことしたからお父さんが」
「ごおおおおおおお。」

またかよ

翌日、ロリ華の住むプリン市街で最悪な事件が起こった。非正規労働者が街で包丁を振り回し、238名殺害したのである。

それだけではない。事件というのは連鎖する傾向があるようで、プリン市の隣、パイナップル市街でも通り魔事件が発生。怒り狂った非正規労働者が352名を殺害。隣県の山本県でも、マツチヨ市とマシマロ市とゴーヤ市で同時に通り魔事件が発生。合計1528名が死亡。いずれも犯人は非正規労働者であった。

非正規労働者たちの知り合いは口々に言う。

「あんな優しい人がなぜ」

愚か過ぎる。優しいゆえに色々我慢して、ついに爆発してしまったことくらい容易に想像できなきやいかん。

警察は全員温泉旅行に行っていたのでまったく対応できなかった。政府は、緊急に特別雇用対策を打ち出すかと思いきや、外交問題やらで頭がいっぱいで黙殺。

マスコミも社会不安が拡大するのを恐れ、報道を自粛。事件は闇に葬られた。

お父さん！！！！

「お父さん！お父さん！」

ロリ華はわんわん泣く。ロリ華のお父さんが病院のベッドの上で目を開けない。

脈はまだあるが、もうやばい感じ。

ロリ華はお父さんの顔をびしびし叩く。うんともすんとも言わない。お母さんもあえて「やめなさい」と言わない。医者が「ご臨終です」と言い、看護婦が白い布をロリ華のお父さんの顔に被せた。

「いやあああああああああああああ」

ざあああああああああああああ

その頃、たけしは、ヨーロッパのマンボロミミニ共和国というところに滞在していた。すでに「ヨーロッパ慕情」第二回はファックスしており、書き下ろし「モンちゃんの逆襲（仮題）」の執筆に取り掛かっている。

たけしは、マンボロミミニ新聞を眺めながら、コーヒーを飲む。

「ロリ華、元気かなあ」

メンドリボンバリゴンマーホテルの窓の外のミツクマヤマヤゴンマリ山を眺める。「さあ。もうひと踏ん張りするか」

ノー・リミット・オブ・ダーク

日本経済は底なし闇。どこまでいっても、闇、闇、闇。下がることはあっても上がることはまずない。永遠の闇。ノー・リミット・オブ・ダーク。

まさしく、今の松本と同じ境遇。松本は相変わらず、あいいうえお地獄。給料は少し増えた。がんばってるので。ただ、時給200円が、210円になったとか、そのレベルである。しんどいことは変わりなし。

ただ仲間が増えた。どういうわけか、あいいうえお課の人数がぐっと増えた。鬼に聞くと、全員元通り魔らしい。こんなに通り魔が、と松本は驚いた。鬼によると、松本が通り魔をしたときは衝撃を世間に与えたが、ここまで通り魔が多いと、世間はもう驚きも何もなく無関心。感覚が麻痺してることだ。

みんな、必死に書いてる。眠りそうになって鬼に棍棒で叩かれてるやつもいる。こいつらも、オレと同じように、こんな地獄が待っていると知っていたらなら通り魔なんかしなかったろうに、と松本は思う。

向こうでは地獄火山が噴火してる。真っ暗闇の空のそこだけが不気味に明るい。

社会保障

再び作者の登場である。

とにかく作者は日々が不安で不安でならない。自殺を考えない日が年に二割、考える日が八割という有り様。

オレは一生バイトなのか？

さすがにこの歳（34歳）になると不安で不安でたまらない。若い時は何も考えず、ただガムシヤラに働いていたが、今は怖くて怖くて思うように身体が動かせない。

会社は完全に自己責任で乗り切るつもりらしい。十年勤務しようが立場がバイトなら社会保障はしないと決めているようだ。

じゃあオレのこの十年はいつたい何だったのだ。プロ作家になつていれば「思えば苦しいバイト時代だったなあ。あはははは」と笑って済ますことができる。

しかし、いまだプロ作家になっていない。

「ライス先生はバイトといえど十年もうちの会社に勤務してくれたので、社員と同等とまではいきませんが、社員に準じた最低限の社会保障をさせてもらいます。当然です。対応が遅くなって本当に申し訳ありませんでした」

と会社が言ってくれば、「いいえ。すべて世のため人のためです。会社のこと好きです。いいですよ。頭を上げてくださーい」とオレも言えるのだが、いまだに学生アルバイトとまったく同じ待遇。言いたくても言えない。

飲んでばかり

ライスは屋台で泣きわめく。

「ういゝ大将。酒だ酒だ」

「じゃんじゃんお飲みよ。ライスちゃん」

日本酒をコップに並々と注ぐ大将。

「あれ？止めるんじゃないの？ひつく」

「もうかるからね。うひひひひ」

その頃、近くのアパートからロリ華が出てきた。あれれ。ちびっこ売春をやめたんじゃないのか。

実はお父さんが死んでから家計を助けるためにお母さんがゴーサインを出したのだ。お母さんのパート収入が月に八万円。ロリ華は一回やると八万円。二回で16万、三回で24万。ロリ華は大黒柱といえる。

「あーあ。もう大人にエッチなことされるのやだな。あーあ」

ロリ華は、屋台に行く。

「おじちゃん。一杯ちょうだい」

ライスはすでにいない。当たり前だ。きちんと書いてないと、ロリ華が動けない。

「あいよ」

大将は、ノンアルコールのにせビールをコップに並々と注いだ。

ロリ華はおでんをつつく。

ひつたくり

たけし・・・ただいま、ヨーロッパで執筆活動している。プロ作家。小学五年生。

ロリ華・・・ちびっこ売春婦をしてる。小学五年生。

サバオ・・・脇役。小説「お尻くん」のファン。

作者・・・34歳。童貞。非正規労働者。アマチュア小説を書いている。

松本・・・34歳。通り魔をしてしまったため、現在、あいうえ地獄にいる。

たけしは、マハラナダリモース国に滞在していたとき、引つたぐりにあった。油断していた。日本ではないということを忘れていた。引つたぐられたバッグの中には、書きかけの小説原稿の入ったノーパソが入っていた。やばい。ほかの何かはどうでもいいがあれだけは困る。締め切り間近である。日本の編集部へ電話したら、日本製のノーパソを送る余裕もないので、原稿用紙に書いて至急それをファックスしてくださいと言われた。仕方なしにたけしは文房具店で原稿用紙を買う。こちらのは当たり前だが横書きだ。しかも横線しか入ってないので、90度ひっくり返し、ペンで線を引いてそれを使った。

締め切り間近ゆえに、予定していた観光はすべてキャンセル。財布だけはポケットに入れておいたので助かった。ムーベランベッカムデリン博物館の前にあるメンバリダンガラホテルに泊まり、そこで缶詰する。

たけしは原稿用紙が慣れないのでふうふう言う。今までずっとノーパソで書いていたのしんどいことだ。今まで書いた分はもはや思い出せないので構想新たに最初からやり直さないといけない。

七枚来たところで朝となった。ホテル内のレストランでバイキング料理を食べたあと、部屋に戻り、シャワー。そのあとすぐベッドに横になり、仮眠。続きは、昼から開始だ。

逸脱

作者がまた登場する。

作者は「ひつぷほつぷ武将」第一部で反復文体というのをやってみた。これは筒井康隆の「ダンシング・ヴァニティ」という長編で使用されてる手法だ。

なぜこれを使ってみたのか。筒井康隆が好きだから、というのは理由になつてないような気がする。筒井康隆はほかにたくさんの手法を編み出している。

おそらく、消極的な理由はラクだから。積極的な理由は、面白いから。あるいは、終わらない日常を描いてみたかったから。

思えば、日常というのは反復であると思う。学生なら朝起きて学校行つて、会社員なら朝起きて会社行つて帰つて寝る。お年よりも、何しとるかわからんが、朝起きて夜寝るのは毎日繰り返してやるだろう。

そんなのが描いてみたかった。これは、なぜと言われてもちと困る。理由が浮かばない。

無理矢理考えれば、日常から逸脱したいという気持ちが最近強いから、それではいかんぞという気持ちを込めて書いたのかもしれない。日常の繰り返しに耐えよオレという意味を込めて。

しかし、小説のキャラクターは耐えられず、通り魔という逸脱をしてしまった。

ゆえに結論としては当たり前だが、息抜きが必要だねということだ。仕事や勉強も大事だけど、遊びを大事にしないとあなたも通り魔してしまうかもしれませんよ？

簡単にいえば、今オレは遊んでないんだな。どこにいても仕事仕事仕事のことばかり考えている。これは実に不健康だ。何かして遊ばないと危険だ。

とはいえ、低所得ゆえにカネのかかる遊びはできん。何かないか。

となると、今のところ、小説を読むのが遊びかなあという気がする。小説は図書館や無料小説投稿サイトで無料で楽しめる。温泉に行きたいねえ。宝くじ当たらないかなア。

閃いた？

一つ閃いたのは反復でなく「逆行」を試してみたらどうだろう。ピートルズの逆回転録音に少し影響を受けている。第三部から第二部、第一部へと話を逆行させていき、最後、たけしが深夜図書館へ向かうところでエンドとする。

なかなか面白い試みだと思うが、ただあと指定枚数まで40枚。40枚でそれをやる自信がない。

急いでやれば何とかできる気もするが、急いでやっても意味ねえしなあということで、この逆行のアイデアは別の作品で使うことにする。

ところで、作者の勤務する塾の室長が変わった。前の室長も女性であったが、新室長も女性である。

ただキャラクターがまるで違う。前の室長は東北人でおっとりしていたが、新室長は大阪人でむちゃくちゃテンションが高い。正直、ビビる。

まあ悪い人ではないんだろうが、ただ大阪人の悪いところはいきなり出とるな。

基本、大阪人つつのは郷に入りて郷に従わない。中国人と同じ。中国人は外国に進出すると必ず中華街を勝手に作る。大阪人にもそういうところがある。

作者、大学るとき、関西に住んでいたが必死で関西弁を覚えた。覚えないと仲間外れにされるので。

しかし、大阪人。あいつらはどこ行っても大阪弁をしゃべる。どの国行っても英語をしゃべるアメリカ人みたいなもんやな。現地の言葉を覚えようとしな。覚える気がない。

いい言い方をすると自信に満ちあふれてる。悪い言い方をすると自己中心、自分勝手、わがまま。

例えば、うちの愛知県岡崎市という地域は同県の名古屋市と比べ

ぐつと大人しい。普通、大人しい地域に引越せば、大人しくするもんだ。テンション高いままだと周りがビビって疲弊するから。

しかし、大阪人はテンションを下げない。大阪流をこり押しする。だから嫌われる。これは中国人と同じ。

ただまあエネルギーはあるわね。そこは長所。

オレは大阪に行ったらテンション上げるね。下げるとさぶくなるから。郷に入りて郷に従ってるわけ。

だから新室長も大人しくやってくれるといいんだけど、せんわなあ。それが大阪人。慣れるまでビクビクする日々が続きそうだ。ただビクつてばかりじゃ仕事にならるので、なるべく新室長に合わせる努力せんとなあ。

くそ。またストレスが一つ増えた。忌々しい。ストレスフリーよ、いずこへ。

まったく通り魔したい気分である。街へ出て包丁を振り回したい。ただでさえ、非正規労働の低賃金重労働で苦しんでるというのに更に大阪人という新たな苦痛がくわった。人生、苦痛の連続である。果たして心の平安は訪れるのだろうか！

新室長。頼むから大人しく優しくしてくれ。出ないと包丁で刺しそうだよ。

つつてもまあ無理だわなあ。言うことを聞かないのが大阪人と中国人とアメリカ人。ごつつ忌々しい。

大阪に原爆を落としたい気分である。

閃いた？（後書き）

この話ものちのち削除かなあ。名誉毀損。てか、そんなに新室長のこと嫌いじゃないし。ただ個人的なストレスの大きさから身近に怒りが向かうんやな。

文句

ただまあもう会社に文句言うのはやめよう。つまり、新室長に文句言うのはやめよう。きりがない。社会保障ちゃんとせえと会社に言ったところでできるわきゃないし。

てか、いまむちゃくちゃ小説に集中してるわけである。朝から晩まで毎日四六時中小説のことを考えてるわけである。本来ならバイト先の塾やスーパーのことももう少し考えないといけない。少額とはいえ一応力ネをもらってる以上は。しかし、ほとんど考えていない。まあ最低限の仕事はしとるが。

だから、ぶっちゃけ、室長に悪いなあという気持ちはあるわけである。ゆえに室長には文句を言わん。だから、室長も文句を言うなと言いたいとこだが言うわなあ。ベテラン講師の割りに仕事してないから。よろしい。文句は言ってよろしい。多少ストレスになるが、それで室長の気持ちが収まるならやってよろしい。許す。それも仕事だ。

オレはひたすら小説に邁進するのみである。バイトのことはどうでもいい。これは悪い意味じゃない。バイトが辛いから無視したいというのであれば悪いことだ。

しかし違う。バイトよりさらにつらい小説の世界に足を踏み入れてしまったゆえにバイトを少し無視せざるをえないというわけで、オレ的にこれは進歩なのである。

しかし、これ周りはわからぬだろうなあ。オレがプロ作家にならぬ限りわからぬだろうなあ。アマチュアのままで。

孤独である。アマチュアも何年続くかわからぬので長い孤独である。

しかし、進め。進まなきゃ進めない。当たり前のことだ。暗闇で光をつかめ。

誰も理解してくれなくてもオレが理解しておれば大丈夫だ。何と

かなる。
進め。

てかてか

てか、てか、小説つうのをもつと深く追求してかなあかん。簡単に言えばもつと書かないといかん。

オレはそもそも小さい頃はマンガや音楽をやっており、今のところ、こちらの方が小説の作品数より多いのでどうしたってそっち中心の発想になる。

もつと言えば、笑いは30年。塾は10年。スーパーは7年半。小説は6年。どうしたって、笑いや塾やスーパーの発想が小説に勝つ。

しかし、それじゃいかんのである。バイトは辞める可能性があるが、小説は一生続けてかないといかんのである。小説の神に命令された。

まあ笑いも一生続けていくが別にお笑い芸人になるわけではない。ゆえに、小説に、小説に集中して、小説を深く追求してかなあかん。

きつく言ってる時点ですとらん証拠。いかな。読む量も増やさんとな。

昔、マンガのネタを得るために大量に小説を消費していた時期があったが、これからは小説を書くために小説を大量に消費したい。

ギター弾くのも小説を書くため。マンガ描くのも小説を書くため。コント撮影するのも小説を書くため。論文読むのも小説を書くため。エロDVD観るのも小説を書くため。

バイトも今のところは小説を書くため。プロになる前に餓死したらどうしようもない。

作者の話はどうでもいい！？（前書き）

前書き大将、海へ出ると。

作者の話はどうでもいい！？

「作者の話はどうでもいい！」

「早くロリ華ちゃんの話に戻して！」

読者から大量のクレーム電話が来たので、ライス寂しく書斎へ戻る。

さて。ロリ華はどうなった。しばらくちびっこ売春婦をがんばっていたが警察のおとり捜査に引っ掛かり、業者は逮捕。ロリ華は普通の小学生に戻る。

たけしは、一ヶ月後、刑務所に戻る。執筆が多忙を極めたため、出所を許され、しばらくはプロ作家を続けていたが学校と両立するのは難しいということで引退し、普通の小学生に戻った。

松本はいまだ、あいうえ地獄にいる。

あいうえ課長に昇進し、日々部下とともにあいうえ業務に励み、地上に安定した電力を供給している。早く小説が書きたいと思う日々だ。

サバ才は、結婚した。できちゃった婚である。

あららら。終わってしもつたぞ。やばいな。どうすりゃいいんだ。枚数まだいぶあるぞ。ううむ。こいつはまいったな。普通に展開すると小説というのはこんなにも早く終わってしまうのだな。ううむ。むむむむ。

作者の話はどうでもいい！？（後書き）

後書きガールはかなりエッチさ。

ようじ。こっから第四部

ひとまず刑務所にいる松本が見た夢の話は終わった。ちなみになぜ終わったかといえ、松本が死刑になってしまったからだ。やはり、あれだけひどい通り魔事件を起こしてしまえば、そうなるのは必然。今、松本は地獄で小説を書いているのだろうか???

ともかく、話は刑務所の外に飛ぶ。

ここはパイナップル市。パパイヤ県にある小さな小さな都市である。

とある住宅街、ここに、山下一郎という男が住んでいた。

山下は34歳。童貞である。両親といっしょに住んでいる。朝はスーパーでバイトし、夜は塾でバイトしている。あとはだいたい小説を書いている。

山下は、ノらないなと感じたら、ビデオボックスで執筆したり、スーパー銭湯へ行き気分転換する。

ミス

ただいかんせん、低所得である。カネのないときはビデオボックスや銭湯は利用できない。

そういう時は図書館に行ったり、ギターを弾いたりマンガを描いたり、テレビで映画を観たりする。

バイト先の塾に新しい講師の先生が入った。プリン大の二年生ですごくかわいい。小柄。目が大きくてロングヘアーで、山下の好みであった。

山下は一目見た瞬間、エッチしたいなあと思った。

ただ、山下はプロ作家になるまでは女禁止にしている。だから、どうにもならない。

山下は仕事が終わって銭湯へ行ったらあと、ビデオボックスへ行き、エッチなDVDを観ながら女性講師を想像し、自分を慰めた。

山下にはそうすることしかできない。無力である。死にたい。

ただそうは言っても生きなければならぬ。慰めを終えたあと、ビデオボックスに備えつけのPCで少し執筆をする。早く小説を所得にせねばならない。そして印税をたくさんもらい、結婚して子供を作らないといけない。子供を作らないと国が減じる。

ただ、やはりバイトは苦しい。特に30過ぎてからが苦しい。低所得と重労働という二重の苦しみがある。

先日もバイト先のスーパーでえらいミスをしてしまった。疲弊からイライラしており、レジでお客様の弁当を横にしてしまい、崩れたにも関わらず取り替えも謝りもしなかったのだ。

山下の勤務するスーパーは低価格のため、チラシ日の日曜日はものすごくレジが混雑し、レジ業務を高速でやらないといけない。ゆえにあまりお客様とのコミュニケーションがとれていない。ゆえにその癖が出てしまったのだ。

もちろん、電話でお客様から怒りのクレームがきた。山下は泣き

ながら謝った。店長にも怒鳴られた。お客様を不愉快にさせたこと大いに反省。お客様を悲しませたことがつらい。

しかし、それ以上に普段やらないミスをしてしまったことがプロフェッショナルとしてどうにも許せなかった。

また、バイトの低賃金重労働からくるミスでもあるにも関わらず、店長の山下に対するフォローが一切なく、ただ怒鳴られるだけだったのでそこも傷ついた。まあ店長としては仕事の厳しさを山下に教えただけなのだが、バイトは低賃金重労働の時点で相当厳しいので、その上厳しくされるともうどうにもならない。

しかも、勤務先の塾で女性の新室長に「しっかりやらないと賃金下げますよ」と言われて頭が混乱している。

すでにオーバーワークである。しかもものすごい安い賃金である。これ以上しつかりできないし賃下げされると生活が成り立たなくなる。正直、仕事を少なくしてもらい賃上げしてほしいと考えていたにも関わらず、新室長に「しつかりやらないと賃下げしますよ」と言われてしまった。

無論、新室長としては山下に仕事の厳しさを再確認させたかっただけだと思う。

しかし、バイトは低賃金重労働の時点ですでに厳しい。さらに厳しくされると頭がパニックになってしまう。

つまり？

つまり、そういう境遇にあるので、書く小説も自然バイオレンスな内容になる。山下は幼い頃はマンガを描いていたが、バイオレンスな内容ではなかった。時代は好景気で両親の所得がよかったのでけっこう恵まれていたのだ。

しかし不況が常態となり貧困の固定化が進行すればするほど、やり場のない怒りが小説に表れてしまうのだ。

山下はできればほんわかした小説が書きたい。元々山下はほんわかした性格だから。

しかし、時代がそれを許さない。山下をより凶暴にダークにさせる。

小説

特に最近山下の書く小説の主人公はなぜか通り魔をしてしまう。山下の願望の表れだろうか。バイトも30を過ぎると夢も希望もなくなただひたすら疲弊し、街へ出て包丁を振り回したい気分になってしまうのかもしれない。

しかし実際に通り魔をする元気がないから、小説で書いてるというわけだろう。いずれにせよ、病んでいる。

山下は頭が狂いそうだ。なぜオレは34歳だというのにバイトで童貞なんだ。

当たり前だが、大学時代の友人はだいたい社員で妻子がいる。山下の方が特殊である。山下からすると彼らの方が特殊なのだが、世の中では少数派を特殊と決定する。

山下は、本当に泣きたい。踏切の前に立ち、飛び込もうかどうかどうしようか悩むこともある。

結局それをしないのは小説があるからだ。死んだら小説が書けなくなる。ただそれだけの思いが山下を生かさせている。

だから、山下は今日も小説を書く。無料投稿サイトにも書いてるし、公募用のも書いている。

とにかく地道にコツコツと孤独に耐え。

小説というのはそういう世界である。

耐えられない

しかしもう山下はこれ以上耐えられなかった。十年バイトをがんばったにも関わらず、社員にもプロ作家になつていない。当然結婚もできない。それどころか風俗にも行けないから童貞。政府からも企業からも一切救済がない。すべて自己責任。

山下はバッグに包丁を忍ばせ街をふらふらさまよう。暴れてしまおうか。やめまいか。

ここで包丁を振り回せば確かにオレの世間に対する恨みは果たせる。しかし、犠牲者や、あるいは犠牲者の遺族はどれだけ無念だろう。

そう考えるとなかなか山下は実行に移せない。

二時間くらいふらふらさまよった。

しかし、突然スイツチが入った。天から声が聞こえたのだ。

「今のままだとじわじわと世間に殺されるだけだぞ！」

山下は立ち止まりしばし考えた。

「よし！わかった！」

山下は大声で叫んだ。

天が、それでこそ人間だと微笑んだ。世間が殺しにかかっているのに世間を倒さないなんてそんなの人間じゃない、人間なら倒さなきゃいけない、生きるためにな、と天は言う。

死刑になることは問わない。というより、このままだと自殺してしまうので、包丁を振り回した方が怒りが世間に伝わり、ほかの非正規労働者の待遇が少しはよくなるので有意義だ。これ以上、非正規労働者の自殺率を引き上げたくない。黙っていたら世間は次々に非正規労働者を殺していく。あいつらは、非正規労働者を人間と思っちゃいない。安いエサでよく働くブタだと思ってやがる。冗談じゃない。オレたちは人間だ。もう許さぬ。

山下は、バッグから包丁を取り出し、バッグを放り投げる。

前を歩いていて、背広を着た50代前半くらいの男性に突進し、背中を刺した。

男性は悲鳴を上げた。山下は背中を力を込め、何回も何回も何回も執拗に刺す。返り血を浴び、山下は真っ赤。男性はしばらくもがいたが、もう声も出ない。

うつ伏せに倒れたところを、男性の胸を刺す刺す刺す！

山下はただひたすら怒りを込めて刺す刺す刺す！

「世間め！世間め！世間め！」

通行人は悲鳴を上げ、方々に逃げ惑う。男性の死体を踏んづけ、山下は追いかける。

パーマのおばはんを捕まえる。おばはんは、いやあとかきちがいと叫ぶ。

山下は、おばはんの頭上にハンマーを振り落とした。

「ぐげ」

おばはんの目の玉が飛び出し、口から血を吐く。山下はおばはんの頭を何回も何回も何回もハンマーで叩く。頭がかけ、脳ミソが飛び散り、もうめちゃくちゃだ。おばはんの面影なし。ただの腐ったミカンのような頭になる。

おばはんが倒れて動かなくなると、おばはんに石油をぶちまけ、ライターで火をおばはんの服に着け、燃やした。

「助けてえ」

「いやあああ」

人々は逃げ惑うが突然の惨事なので、アスファルトに尻餅をつく人もいる。

茶髪の若い男はアスファルトに座って動けなかった。

山下は包丁を握りしめ、息が荒い。目は血走っている。

「ゆ、許してください。お願いします。お願いします」

若者はわんわん泣いて頼んだ。

山下には聞こえてない。山下に聞こえているのは「生きる」「敵を倒せ」という天の神様の声だけである。

山下は若者の顔を思い切り蹴飛ばした。「ぐはっ」

若者は鼻血を出し、仰向けに倒れた。

山下は若者に馬乗りになり、若者の喉を包丁で突いた。

若者は声も出ない。目が白目になってる。口から血を吐き、失禁していた。異臭が漂う。大便もわずかにもらしていた。

山下は動かない若者の喉を何回も何回も何回も何回も執拗に突く。

「世間め！世間め！世間め！世間め！」

マンホール

山下は警察に追われ逃げに逃げた。

「はあはあ。なんで正義のオレが追われなければならないんだ」

またしても天から声が聞こえる。自業自得さと笑ってる。「く、くそ！だましたな！おのれの正体は悪魔か！」

天は、いいやと答える。

「そんなチンカスじゃない。オレはアメリカだ」

山下はマンホールのふたを開け飛び込む。ふたが閉まらないからすぐ見つかるだろうに冷静な判断力がない。

しかし、警察も判断力を失い、あちこち探し回っている。

山下は臭い暗い下水道の脇で疲れ果て、いつの間にか眠ってしまった。

夢の中で山下はランドセルを背負った小柄の女の子と腕を組んで歩いている。娘だろうか。

「山ちゃん。ホテル行こ？ロリ華、エッチしなくなってきちゃった」

「うん！」

どうも彼女らしい。

これは児童書のため、エッチシーンは省略する。

エッチをしたあと、ベッドの上で抱き合ってる。目を見つめあつて。

「あたし、山ちゃんといると幸せだな」

「オレもだよ。ロリ華」

ぎゅっと抱きしめあう。二人とも弱い人間だが、二人でいると強くなれる気がする。

山下とロリ華はホテルを出る。だいぶ暗い。

すると、前方から、変な男が走ってくる。よく見ると包丁を振り回している。

あっという間にロリ華は刺された。山下はビックリして声が出な

い。アスファルトに倒れるロリ華。

男はそのまま去る。警察が追いかける。

「ロリ華！ロリ華！」

「や、山ちゃん。あたしもうだめ」

「しっかりしろ！しっかりしろ！」

ロリ華を抱き抱える山下。間もなく救急車が到着し、ロリ華は担架で運ばれる。山下も救急車に乗り込む。

そののち、病院で緊急オペとなり、ロリ華は一命をとりとめた。

しかし、精神的に障害を受けた。ロリ華は事件のショックから口が聞けなくなり、ごはんも食べない。ロリ華は日に日にやせ衰えていった。

西岡

山下は気がつくと、警察病院にいた。下水道で寝ているところを捕獲されたようだ。

何ヶ月かのち、山下の死刑が決まった。

山下と仲がよかった同じバイト仲間の西岡はニュースを観てショックでならない。同僚は「アホなやつだなあ」とか「頭おかしいね」とささやき合っているが、一歩間違えれば自分も山下と同じことをしている和西岡は思った。それほど、現在の非正規の状況は厳しい。西岡も山下と同じ34歳で童貞で非正規労働者なのだ。山下が勤務していたのと同じスーパーで朝バイトをし、夜塾でバイトしていた。だから仲がよかった。小説も山下の影響で書いていた。西岡もまた両親とともに暮らしている。低所得のためアパートが借りられないのだ。

ちなみに、西岡も山下と同じく、ビデオボックスと銭湯に行くのが好きだ。

西岡は、しかしオレは山下の分もがんばって小説を書こうと思った。それが山下のためだと思ったのだ。

しかし、ある日、西岡にも天の声が聞こえてしまう。

「お前、小説なんてそんなに甘い世界じゃないぞ。このままだと一生バイトだぞ。一生結婚できないぞ。それは世間が低価格を求めるからだ。世間が適正価格を払っていれば、お前たちも適正報酬を受けることができるのだ。しかし、世間は適正価格を支払わない。なぜか、わかるか。自分たちの幸せのためなら、非正規労働者の命などどうでもいい、ゴミみたいなもんだ、と考えてやがるんだ。悔しくないのか」

西岡はナップサックに包丁を入れ、街をさまよった。天に言われ、暴れる決意をしたが、しかし、どうも間違ってるような気がしてならない。しかし、このまま何もしなくても結局自殺するしかないの

で、何かをした方がいいのではないかという歪んだ考えが頭を支配する。

「よし！」

西岡は、ナップサックから包丁を取り出し、ナップサックを放り投げた。

前を歩いていて、頭の薄い老人に突進し、背中を刺した。
老人は大声で叫んだ。通行人がびくりして逃げる。

西岡は、老人の背中を執拗に何回も何回も何回も刺す刺す！！
返り血を浴びる西岡。

「オレは何をやってるんだ」
天が笑ってる。

「くそ！だましたな！」
しかし、もはや後には引けない。

倒れた老人に馬乗りになり、顔面をハンマーで叩く。もはや原型がない。

包丁で腹を裂き、内蔵を取り出し、むしゃむしゃ食べた。
げえええええと吐いた。老人の死体を踏んづけ、次の獲物を探す。

小学生が数人歩いていた。

逃げ遅れた二人を両手に持った二つのハンマーで、小学生二人の頭上を思い切り叩く。

小学生は同時に倒れた。

小学生を重ね、上から槍を刺して、貫通させた。小学生は涙を流しながら、脱糞し、事切れた。

西岡は持っていたライターで小学生を燃やした。
焼けた小学生の肉をむしゃむしゃ食べた。

げええええとアスファルトに吐いた。
天が腹を抱えて爆笑している。

しばらくして、警官が駆けつける。西岡はその場で逮捕された。
「オレは小説家になりたいんだ！オレは小説家になりたいんだ！」

パトカーの中で西岡は泣きながら叫び続けるが、警官には何のことかさっぱりわからなかった。

何ヶ月かして西岡の死刑が確定した。

笹村

西岡の親しい友人笹村はニースを見て驚きを隠せなかった。オレがしようとしたことをあいつしやがったと思った。笹村も西岡と同じ34歳で童貞。非正規労働者なのである。西岡と同じスーパーと塾でバイトしていた。両親とともに暮らしている。低所得すぎてアパートが借りられないのだ。小説をずっと書いている。

笹村は頭を悩ます。上司は社員なので「バカなやつだなあ」で済ませていたが、非正規労働者の笹村にとっては冗談ではない。社員は社会保障があるので将来を設計することができるが、非正規労働者は、今日生きるか死ぬかに怯え、しかも貯蓄ができない。しかも簡単に解雇される身なので、将来なんてあつてないようなものだ。通り魔をしていなかったとしても相当過酷な日々が保証されているのである。しかも長期に渡り。

笹村には天の声は聞こえなかった。しかし、自然に包丁をバッグの中にいれ街をさまよった。

そして、ついに、包丁をバッグから取り出し、振り回した。

通行人は突然のことであわてた。逃げ惑う。

笹村は逃げ送れたOLの背中を包丁でぶさりと刺した。OLは悲鳴を上げ倒れた。

そこを馬乗りになり、笹村はOLの背中を何回も何回も何回も刺す刺す刺す刺す刺す刺す！！

「はあはあはあ。世間のやつらめ。許せねえ。なんでオレたち非正規労働者を苦しめるんだ。ちきしょう。ちきしょう」

笹村は次の獲物を探した。

しかし、みんな逃げてしまい、誰もいない。笹村は近くのビルに火をつけた。

ビルは激しく燃えた。そのビルの火が隣に移り、その火がまた隣に移り、いつの間にか、街は火の海となった。交番も燃えたので、

笹村は逮捕されなかったが、当然、笹村も燃えて死んだ。

最悪の事態

しかし、悪いことは続く。

梨本陽一は、自衛隊員であつた。しかし、非正規である。

正規の自衛隊員と違い、非正規の自衛隊員は、真つ先に最前線に送られるし、おまけに月収が12万円で、正規隊員は寮が無料なのに対し、非正規は寮代を三万円とられる。

陽一はもううんざりしていた。せつかく国のために働いてるのに、何という待遇だろう。

自衛隊は極秘で原爆を開発していた。日本くらい技術があると、それくらいわけがない。風爆という新型爆弾も開発していた。これは、投下した地点から東西南北にもすごい風が四方に吹き、なにもかもがぶつ飛ぶという恐怖の爆弾だ。

陽一は原爆管理局に勤める非正規局員に呼びかけ、また知り合いの非正規空軍兵士にも呼びかけ、極秘で戦闘機に原爆・風爆・灰爆・泥爆などを搭載した。実に40機。

そして極秘に、深夜の朝に近い頃、日本の主要都市に向け、飛び立った。

そして、その日の午前8時15分、同時多発的に、日本40主要都市に爆弾が投下された。

その犠牲者の数、1800万人。日本史上、最悪の事件となつた。偶然にも、日本の非正規労働者の数は1800万人であつた。

たけし再び

たけしは原爆のニュースを噂で聞いた。とにかくテレビ局もラジオ局も新聞社も全滅だったので噂でしか知ることができなかった。犠牲になった都市の近くの都市では被爆にあった人が難民のように来るのですぐにわかったが。しかし、あまりに被爆者が多いため、近隣都市の住民も対策に頭を悩ませているようだ。

たけしの住むプリン市は山に囲まれた盆地にあったため、そういうことはなかった。

それはともかく、たけしは夜勉強中、歴史で原爆と人種差別の關係がよくわからなかったので深夜図書館に行くことにした。

「母ちゃん。おにぎり作って」

「なんで。食べたばかりやん」

「深夜図書館に行くの」

たけしは母親に作ってもらったおにぎりをナップサックに入れ、自転車にまたがって、飛ばした。

「夜風が気持ちいいなあ」

たけしは、明日の歴史テストが中止になることを知らなかった。

珍太郎先生が県庁のあるプリプリン市に出張中、被爆して死亡していたのだ。

その頃、ロリ華はマンガを読んでいる。少女コミックだ。

「続きが読みたいなあ。そうだ。深夜図書館に行こう」

最近はお子にも利用してもらおうということで、図書館にもマンガをたくさん置くようになったのだ。勉強しないロリ華にとって明日のテスト中止は天からの恵みかもしれない。

深夜図書館

深夜図書館の隣の民家に飯田誠という男性が住んでいた。彼は34歳で童貞で非正規労働者である。

誠は、正直、生活が本当に苦しい。報酬をきちつと会社からもらえないのである。

一応、小説を書いているが、こちらは相当に厳しい世界だ。百万部売れば印税が一億円入る世界だが、文庫の場合、八千部なら24万円である。とても生活できない。そもそも志願者が鬼のようにいるのでデビューは東大に入るより難しい。

それはともかく、誠は今両親と一緒に暮らしているので何とかやっていけるが、両親が亡くなった場合、今の所得では相当きつい自分が怠けてるからこういう目にあうのか。

いや。日々、巨大なストレスを抱え、過労寸前である。これ以上がんばれないというほどがんばっている。誠のせいでは断じてないでは、企業の責任か。それは確かにあるだろう。バイトといえど十年も雇用すれば、ある程度社会保障をしないとイケない。

しかし、企業はまるでしようとしない。

では、政府の責任か。それも確かにあるだろう。これだけ低賃金ということはボランティアに限りなく近い。だから企業は非正規労働者に援助をしなければいけない。

しかし、丸つきりしない。

だから、誠は誰に文句を言えいいのかわからないわけである。

自然、お客様に向かう。普通、お客様は神様だ。お客様が商品を買ってくれるから従業員が生活できるわけである。

しかし、ここまで賃金が安く生活が苦しいと、これはひよつとしてお客様が適正価格でない低価格を要求するのが原因ではないか、お客様は悪魔ではないのか、と歪んだ考えをしてしまう。

だから、誠は通り魔をしたくてしたくてたまらない。世間に復讐

がしたい。自分をこんなにも苦しめる世間に。

もういやだ！！

誠はもついいかげんに耐えられず、カバンに包丁を忍ばせ、街に出た。

カバンから包丁を取り出し、カバンを放り投げた。

そして、「低価格やめろ！適正価格を支払え！」と、誠にとってはごく当たり前、通行人にとっては意味不明の言葉を叫びながら、包丁を振り回して通行人を追いかけた。

逃げ遅れた老婆の背中を刺す。

老婆は倒れる。誠はそこに馬乗りになり、さらに背中を何回も何回も執拗に刺す刺す刺す刺す！

老婆はもはや動かない。返り血を浴び真っ赤になる誠。

誠は、老婆の死体を見て急に怖くなってしまった。これは本当にオレがやったのか。

こんなことをすればオレは死刑になり、もう小説が書けなくなってしまっではないか。

誠は包丁を落とし泣き叫んだ。

「うわああああん。うわああああん。うわああああああん」

思うに

作者が思うに、自己責任100%というのは危険ではなからうか。会社への忠誠心が薄れる。もちろん雇用責任100%もやばい。従業員が怠ける。

これは社員とか非正規とかプロ作家とか関係がない。

んで割合はといえば、5:5のときもあれば、8:2ときも、2:8のときもある。10:0や0:10が危険だと思うのである。

ともかく、しばらくして、誠の死刑は確定した。しかし、世間はそれどころではないのだが……。

たけしとロリ華は、深夜図書館でばったり会った。

「あつたけし」

「ロリ華」

二人はそれぞれお望みの本を持ってきてソファに座った。

「あとでおにぎり食べようぜ。母ちゃんに作ってもらったんだ」

「わあすごい」

たけしは歴史の本をロリ華はマンガを黙って読んだ。しばし、至福の一時である。世間がどれほど大騒ぎでも、ここは静かである。ぷう。

「たけし。くさーい」

「ごめんごめん」

屁の音さえ目立つ。

肉まん再び？

しばらくして、ロリ華とたけしに誰かが紙コップに入ったオレシジュースを差し出した。

見るとその誰かは、顔があ肉まんであった。

「あ、ありがとうございます」

「いえいえ。ばく今警備してるから何かあったら呼んでね」

「は、はい」

そう言つてその肉まんの顔した男の人は去つた。

「ぶつあの人、顔が肉まんだったねえ」

「面白いねえ」

さらにしばらくして誰かが、二人に飴^{あめ}ちゃんをくれた。

その誰かは顔がお尻で、そこから腕と足が突きだし、一等身であった。

「なんかあったら呼んでね。警備してるから」

「は、はい。ありがとうございます」

そのお尻の人は去つた。

「ぶぶぶ。あの人、顔がお尻だったねえ」

「面白いねえ」

二人はうふふふと笑い、再び本を読み始めた。

「うう水をくれえ。水を」

「ど、どうぞ」

「がぶがぶがぶ。うっ」

「あつ倒れちまつた。そうか。水飲んで安心してしまつて」

仮眠室

二人は夢中になって本を読んでいた。時間が経つのも忘れる。楽しいよな、読書ってやつは。

ただ明日は学校だ。寝なきゃいけない。二人は本は借りるとして仮眠室へ向かった。

仮眠室にはベッドがある。そこで横になり、少し早めに起きて家に戻り着替えてから学校に行けばいい。

「たけし。あたし、シャワー浴びてくるね。覗^{のぞ}いちゃいやよ」

「う、うん」

「うう。ううう。軍医さん。苦しい。痛い。助けてくれえ。助けてくれえ」

「おい！そいつは手当てするな。薬に限りがある。助かる見込みのあるやつだけ手当てするんだ！」

「は、はい」

「ううう。苦しい。苦しい」

「助けてくれえ。助けてくれえ。ううううう」

ゴーヤ市にて

設定確認

たけし・ロリ華・・・深夜図書館で仮眠中。

世間・・・主要40都市に原爆投下。

通り魔・・・死刑。

作者・・・作家志望の非正規労働者（34歳、童貞）

あと、10枚。

ゴーヤ市西ゴーヤ町に住んでいた大村信二。彼は、ゴーヤ新聞を読み、衝撃を受けた。国内主要40都市に原爆や風爆が投下されたというのだ。

大村は正直、残念だった。どういう意味かといえば、大村は非正規労働者である。しかも、34歳で童貞だ。両親といつしよに暮らしている。低所得過ぎて結婚ができない。できないし、独身の状態でも相当な貧困を強いられている。一応、小説を書いているがこちらには厳しい世界だ。プロになれるかどうか知らない。そんなわけで、ストレスが極限にまで高まり、大村は街へ出て通り魔をしようと計画していたのだ。

しかし、今通り魔しても何の衝撃も世間に与えることはできない。何しろ、原爆や風爆が40発も投下されたのである。

大村は迷った。計画は中止にするか？ やっても意味がないではないか。大村の目的は、非正規救済法の制定であった。通り魔をして世間に衝撃を与えれば、政府が動き、非正規に社会保障をする法律ができるのではないかと考えたのである。

しかし、今はそれどころじゃないだろう。緊急原爆対策委員会が

設置された。非正規より原爆の方に世間の関心は傾いている。原爆対策法の制定の方が先だろう。

大村は新聞を置き、ため息をついた。ちなみに、大村は世間で非正規労働者による通り魔が増えることや、原爆投下が非正規自衛隊員の犯行によるものということを知らない。報道規制されてるのだ。

しかし、まもなくして大村は通り魔への意志が再燃した。両親が帰ってこないのだ。まさか、ひょっとして原爆の被害にあったのか。果たしてそうであった。大村に言うと自分も連れてけといわれるので、内緒で両親はケチャップ市に旅行に行っていた。そして、ケチャップ市に原爆が投下されたのである。

大村は何日経っても両親が帰ってこないの、これは間違いないと思った。

大村はこれで決めた。通り魔をしよう。何しろ、大村は一日9時間週6で働き、月収が96000円である（バイトの時給がスーパーが400円。塾が500円）。両親がいなくなればもう生活できない。死ぬしかないのである。どうせ死ぬならば、世間に衝撃を与えなくてもいいから、誰かを道連れにして死のうと思ったわけである。人間、極限まで追い詰められると歪んだ考えをする。

主要都市で原爆被害があるのが、田舎の都市では普通に活動している。大村はゴーや市街で通行人にまぎれた。バッグの中には包丁を忍ばせている。

大村は迷う。月収96000円でも生きることができなのではないか。

メモ帳を取り出し、一人暮らしするとどうなるか、計算してみる。

ガソリン代	5000円。
ケータイ代	8000円。
市県民税	5000円。
光熱費	10000円。

アパート代 50000円。
健保年金 30000円。
これで、108000円。

「だめだ！やっぱり生きていけない！食費がない！！飢え死にする！！」

大村は、しかしまだ迷う。とはいえ、健康保険と年金を払わなければ何とか食えることができるのではないか。

しかし、それでも、食費が18000円である。しかも、貯蓄ゼロ。これでは生きてるのか死んでるのかわからない。やはり、通り魔するしか方法はないのかもしれない。

しかし、まだ迷う。オレが通り魔をここですれば、オレの気持ちには確かにスツキリするかもしれない。

しかし、犠牲者や犠牲者の遺族はどんなに悲しいだろう。オレだって、身内が犠牲になれば悲しいし、やりきれない。

しかし、その身内もう原爆によりいない。

大村は混乱する。かすかに涙を流す。思えば、ろくなことのない34年間だった。彼女がいなし、カネもない。ひたすら仕事と小説の十年間。小説に関してはいまだに芽が出ない。それどころか、スーパーと塾の仕事も社員でないことを考えれば芽が出てないと言える。

大村は、これはもう通り魔するしか道がないと思う。

しかし、まだ迷う。一度死んだ気になって、もう一度チャレンジしてみたらどうだろう。

しかし、今、雇用は本当に厳しい。ほとんどバイトしかない。多くの労働者は公園に住みながら会社に通っている。公園生活にオレは耐えられるだろうか。それに原爆がこんなに落とされたら、そのバイトさえも見つからないかもしれない。

しかし、そのバイト生活にもう疲弊してるわけである。大村は、やはり、通り魔するしかないと思ひ直す。

通行人は大村の考えとは別に楽しそうである。原爆のことなんて考えてない。前を歩く女子小学生。オレにも子どもがいればあれくらいの子がいるかな。

大村は考え直す。あんなかわいい子を犠牲にできるものか。

しかし、また考え直す。しかし、犠牲になつてオレはどうなるというんだ。低賃金重労働。世間が低価格を求めるので、結婚したくてもできない。こんなバカな話があるか。なぜ非正規労働者ばかりが犠牲にならなければいけないんだ。同じ人間なのに、なぜ社員だけが結婚できて、非正規労働者はできないんだ。やはり、通り魔をして世間に非正規労働者の怒りを示すしか方法がないのではないか。

しかし、まだ迷う。人間として通り魔はあかんやろと。牛やブタを殺すのとは違う。牛やブタを殺すのは食うためだ。しかし、通り魔は違う。無意味な殺人である。そんなのは人間としてやってはいけないんじゃないか。

しかし、大村はまた思う。しかし、人間がやるようなことじゃないことを世間は我々非正規労働者にしてくる。極度の低賃金で極度の労働を押し付ける。ほとんど犯罪である。人間のやることじゃない。人間ならば、低賃金であるならば生活が苦しくなりへろへろになるので死なないように労働を減らすはずである。あるいは、重労働を課すのであれば、そこから派生する巨大なストレスを解消するために、賃金を増やすはずである。しかし、その両方とも世間はしようとしな。相変わらず、非正規労働者に低賃金重労働を課す。もはや鬼の所業である。通り魔なんてかわいいものではないか。襲ってくる世間を倒すという意味でいくぶんか人間的でさえある。

大村はやはり通り魔をしようかと思う。包丁を取り出そうかどうか迷う。

しかし、また考え直す。いや、やはり歪んだ考えだ。オレは小説家になるためにバイトをしてきたはずである。それは自分の責任じゃないか。企業や世間のせいにしてはいけないのではないか。

しかし、また考え直す。しかし、十年も勤続していればバイトといえど多少の社会保障はするはずである。完備とまでは無理にしても多少はするはずである。十年も雇用しておいて雇用責任がまったくないとは言えない。企業がしないなら政府がすればいい。それなのにしない。これはどう考えてもおかしい。

大村はやはり通り魔するしかないと思う。黙って何もしなかったら、誰もこの苦しみがわからない。

しかし、大村はまだ迷う。やはり、結婚して子どもを作って一緒に暮らしたい。通り魔なんかすればそれはもう不可能だ。死刑になるから不可能である。やはり、通り魔はできぬ。

しかし、また大村は迷う。しかし、今の状況だと一生結婚も無理だし子どもを作るのも無理である。それどころかオレが生きることさえ難しい。やはり、通り魔しかないのではないか。

大村はバッグにある包丁が気になつて気になつてしょうがない。

取り出して暴れるべきか、取り出さないで苦痛の生活に戻るべきか。

どちらもいやだ。しかし、大村は選択しなければならない。

ラブ&ピース（完結）

「ぐはっ」

その瞬間、大村の背中に激痛が走った。

「??????」

大村はアスファルトに倒れた。

前方を誰か走っていく。片手には包丁を持っている。通行人が悲鳴を上げ方々に逃げる。

逃げ遅れた人がその誰かの餌食になる。「うぎゃああああああああああ」

大村は頬をアスファルトにつけ、細い目でそれを眺めながら、思考があやふやになってくる。何だあいつ。オレがめちゃくちゃ悩んでることをいとも簡単にやりやがって。いててて。ううう。血が止まらない。寒い。全身が寒い。ううう。そうか。包丁で刺されるというのはこんなにも痛いものなのだ。やらなくてよかったな。人をこんな目にあわせちゃいけない。しかし、ううう。ううう。結婚したかったな。子どもと遊びたかったな。ううう。小説家になりたかったな。ううう。痛い。ううう。痛い。頭がぼんやりする。胸が熱い。焼けるように熱い。目の前が歪む。景色が揺れてる。ぐらぐらゆらゆら。オレもうだめなのかな。もう終わりなのかな。どうな。

大村は薄れ行く意識の中でかすかに「ラブ&ピース」とわけのわからないことをつぶやいた。大村が好きなジョン・レノンの影響だろうか。

包丁を持った誰かは次々と通行人を刺して行く。もはやまともな状態じゃないだろう。かなり興奮している。

その誰かって結局誰なんだって？

まだわからないの。アホだなあ。

お前だよ。

ひつぷほつぷ武将 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2965o/>

ひっぴ第三部書き直し

2011年1月22日17時55分発行